

# 武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2024.11.17 No.26



## 第10期新体制が決まりました

役員選挙が行われ8月に選挙管理委員会（田邊実香選挙管理委員長）から開票結果が報告されました。以下の10名の方が選出されました。投票率は32.1%でした。

上田 孝俊、木田 重果、小谷 正登、田崎 由子、中村 又一、中尾賀要子、長谷 範子、吉岡 眞知子、吉益 敏文、渡邊 由之（五十音順、敬称略）

### 第10期役員体制

会長：木田 重果

※ 会長・副会長・事務局長を3役とする。

副会長：中村 又一

※ 筆頭理事は3役会議に加わる。

事務局長：吉益 敏文

筆頭理事：渡邊 由之      研究部長：吉岡 眞知子      会計監査：小谷 正登・中尾賀要子

【事務局】事務局長：吉益 敏文

事務局次長：二羽 礼      会計担当：高橋 孝子      事務局員：春木 美治

【編集委員会】編集委員長：木田 重果（第16号発行まで。以後交代）

編集委員：田崎 由子・長谷 範子・二羽 礼・村越 直子・安井 勝

※ 編集委員会の次期体制は、3役・編集委員会合同会議で決定する予定です。

選挙管理委員会の田邊さん、今井さん、お世話になりました。ありがとうございました。

武庫川臨床教育学会

<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育研究所内

電話番号:075-922-7749（吉益自宅）

メール: [mukogawarinkyo@yahoo.co.jp](mailto:mukogawarinkyo@yahoo.co.jp)

## 小さな学習会、盛況でした



### 9月7日（土）

「児童養護施設の現状と入所中の子どもたちが抱える社会のギャップ、退所後の子どもたちの社会的な孤立」  
小西 健太さん（大阪西本願寺 常照園）

具体的なエピソードをまじえてお話していただき常照園の取り組み、子どもたちの現状、声、退所後の交流の様子がよくわかりました。

小西さんは西本願寺常照園で13年間勤務しておられ、昨年からは主任として、職場環境や入所する子どもたちの生活環境を整えるために日々努力しておられます。小西さんが生まれ育った地域に児童養護施設があり、小さい頃から施設について疑問や不満を抱えながら、学校で過ごしていく中で、自動養護施設で生活する子どもたちへの違和感を解消できるのではないかと考えられるようになり、その思いが児童養護施設の職員を志すきっかけになったということでした。

参加者から「ぜひ、常照園を見学したいです」という声があがり来年度具体化させてもらうことになりました。小西さんお忙しい中、学習会参加ありがとうございました。

### 8月31日（土） 桃山学院教育大学訪問

残念ながら、台風のため訪問は中止になりました。加藤会員にお願いして次年度に具体化をはかることにしました。理事会でも確認いたしました。緑豊かな環境にあり、建物はヴォーリス建築事務所が手掛けています。来年度からは桃山学院との統合も決まっております。この機会に、是非ご参加ください。

### 11月2日（土）

「あなたの居たいところにおいていい～保健室から創る希望」

山形 志保さん（養護教諭）

オンラインで開催し、会員の方や学生の方など20名以上の参加がありました。いくつか感想を紹介します。

（タイトルは編集部で付けさせていただきました）※山形さんのお話は著書の『保健室からの希望』をご参照ください。

#### ◆現場ならではの人間ドラマ（タイトル編集部）Aさん

本日は山形先生から現場ならではの人間ドラマのお話を聞くことができ、現場の魅力にとりつかれてしまう私がいきました。山形先生が生徒を追い詰めてしまったAさんの経験を経て、さやかちゃんを通じ、どんどん、生徒とともに伴走し、ともに成長されていくそのお話しに、心が動かされっぱなしでした。

山形先生のお話を聞きながら、私の保育士時代と重ね合わせる部分（子どもに大怪我をさせた経験）。それを経て、今、私は専門学校の講師をし、その中で、のびのびと元気いっぱい生きている生徒たちを「勉強ができない、態度が悪い」などと、冷やかな目で見ると、怒鳴り付けて学校に登校させようとする先生と、どう生徒たちと幸せに学び合える場にしていこうかととても悩んでいたところでした。

まだまだ、社会は大人主体の教育ではありますが私自身は生徒たちと接する中で、どんどん生徒から私が幸せの種をまいてもらっているように、また、お水を頂き、ぐんぐん成長させてもらっているように思う今日この頃です。

生徒と戯れる時間が今は自分が一番自分らしく、解放されている幸せな時間かもされません。

大人は良いとか悪いとかで判断しがちですが、子どもは「楽しいか楽しくないか」で判断します。（山形先生の話にも出ました！）大人ももっとシンプルで楽しい事、たくさんして大人がもっと生きている幸せを感じ、のびのびと生きたら社会は変わるかなあとと思います。楽しくのびのび生きていきまーす。



#### ◆学校に行けなくしたのは Bさん

大変貴重なお話を聞かせていただきました。私は本年度から地元の教育支援センターに勤務している元小中学校長ですが、不登校の子は無気力だというのは真っ赤な嘘であることを日々実感しています。彼らは実にエネルギーに溢れています。伴走型支援をと思いながら、こっちの体力が続くのかと心配になるほどです。結局、彼らにとって学校が自分をそのまま出せる場ではなかったということなんだろうと思います。

教育支援センターは昨年まで「適応指導教室」という名称でした。これは、「適応」できない子どもは学校にとって「指導」しなければならない存在であるという学校的な価値を優先する呼び方です。今でも近隣地区では「適応指導教室」のままのところも結構あります。せめて、そこにだけでも違和感を持ってほしいと願わずにはられません。

そもそも彼らが学校に行きたくても行けなくしたのは学校です。先生に責任の全てがあるとは思いません。学校という強固なシステムが、学校的な文化を醸成し、先生方も、保護者も、そして本人もそこから抜け出せないでがいているのだと思います。今や、子どもが学校に「適応」できていないのではなく、学校が子どもに適応できていないということに気づいてほしいと願い、地元の先生向けにコラムを書いて地教委経由で学校に届けてもらっています。かねて勤務していた市教委の小中学校にも同様のコラムを送り、今年 100 号を超えました。その影響があったかどうかはわかりませんが、最近学校のあり方（システム）の改革に着手する地元の中学校も出てきました。

今の学校は明らかに制度疲労を起こしています。このままいくと、学校は子どもや保護者から見放されるときがくるのではないかと（不登校はまた最多を更新しましたから、もう始まっているのかもしれませんが）と思います。今日の山形先生のお話を聞いて、粘り強く訴え続ければ、「希望の種」は広がっていくという思いを強くしました。こうした機会を与えてくださった山形先生、並びに武庫川臨床教育学会の皆様感謝いたします。

#### ◆一緒に時間をかけて Cさん

本日はご講演を大変ありがとうございました。現在、大学で保育士養成をしておりますが、学習にも資格取得にも、生活にも向き合えないような学生が多くおります。

学費が大きな負担になっており、大学に通うことが学生の幸せにつながるのかという思いに苛まれることもあります。それでも、大学が、一時でも身の安全、心の安全が守られ、良識ある大人と関わる場所になればと思い、そのために私自身が研鑽を積まなければならないとっておりますので、山形先生のご講演やご著書に大変学ばせていただきました。私の研究室が、カフェにもなり、恋愛相談室にもなり、お昼寝場所にもなり、「ここに住みたい」という学生もおります。教育としてどうなのかと迷いながらですが、一緒に時間をかけて「種」を探せば良いのだなと分かり、学生一人ひとりが持つ種に信頼して関わっていきたいと思います。たくさんのご示唆を賜りまして心より感謝申し上げます。



### 次年度の大会について



2025年の大会は、3月8日（土）武庫川女子大学教育研究所にて開催予定です。（詳細は次号でお知らせします。）



### 今後のニュースレターの配布について【要確認】

10月から郵便料金が値上がりしたことを踏まえ、予算軽減の面から、今後のニュースレターについては電子メールにて送信をと考えております。ただし、しばらくは、郵送を希望される方、メールアドレスが不明な方に、紙のニュースレターを郵送いたしますので、学会事務局のメールアドレス（mukogawarinkyo@yahoo.co.jp）に、紙のニュースレターを希望する旨、ご連絡いただけますでしょうか。お手数ではありますが、よろしく願いいたします。

### シリーズ：私と臨床教育学②

私が武庫川女子大学臨床教育学研究科の修士課程に入学したのは、日本臨床教育学会が発足した 2011 年でした。同年には、3 月に東日本大震災も発生しました。当時、田中孝彦先生や上田孝俊先生が震災直後から東北に足を運び、現地の人々の話を聞き、現場の状況を報告してくださったことを覚えています。また、授業では阪神大震災を経験した同級生たちが、今の被災者たちに何が起きているのかを一緒に考えようと話題を提供してくれました。そこで語られた教師、看護師、介護福祉士などの話を通じて、臨床の実践知や経験知の奥深さを知りました。

初年度は、臨床教育学という学問の持つダイナミズムに感動し、圧倒されました。自分には何ができるのか、ダンスを通じて何ができるのかという漠然とした問いが、臨床教育学を通じてより明確に感じられるようになりました。

私にとって臨床教育学との出会いは、田中孝彦先生との出会いです。ロマンティックな出会いのように聞こえるかもしれませんが、実際は修行のようなものでした。毎週、自分が書いたものを田中先生に読んでもらい、大学院の授業でありながら、日本語の使い方を基本的なところから教わる日々でした。ゼミでの講読の時間は心臓がバクバクしており、読み通すだけで精一杯でした。しかし、厳しい修行を同期や先輩たちと共有できたことは、私にとっての青春時代の一つとも言えます。

田中先生はゼミの中で「問いを育てる」とよく口にされていました。私はダンスを専門としており、人生の中心に踊りがありました。田中ゼミでは、みんなが私のダンスやソマティクスの話に興味を持ち、真剣に耳を傾けてくれました。授業で踊ったり歌ったりしても、みんな真面目に受け入れてくれたことが信じられませんでした。今思えば、理論的な根拠もなく独りよがりなことばかり言っていたようで恥ずかしいですが、それでも学ぶ楽しさを知りました。難しい本も読むことができました。例えば、ジュディス・ハーマンの『心的外傷の回復』、アーサー・クライマンの『病いの語り』、エレンベルガーの『無意識の発見』などです。これらの書物を通じて、私が研究しているソマティクスと臨床教育学が類似の方法で社会に貢献しようとしていることに気づきました。こうして、ダンスやソマティクスが臨床教育学の「からだ」を支えると信じるようになりました。

こんな風に当時を思い返すと、私はもう一度みんなの前で踊りたくなるのです。臨床教育学は、人と人との関わりを通じて人の内側にある躍動を引き出すものだと考えています。そして、それは柔軟で優しく、大きな力を発揮できるコミュニティでもあると思います。だからこそ、私は臨床教育学で育む「からだ」について、これからも問い続けたいと思います。

（次号は影浦紀子会員の予定です）

## 編集後記

▶ 第 10 期の体制がきまりました。新体制で楽しく学会活動を継続しようと思います。よろしくお願いたします。▶ 小さな研究会が好評です。今回はその特集です。▶ 3 月の大会でまたみなさんとお会いできることを楽しみにしております。

（詳細次号）▶ つかの間の秋です。楽しみつつご自愛ください。 <文責：吉益>